

イヌワシが狩をする環境の創出試験ーみなかみ町赤谷プロジェクトー

公益財団法人日本自然保護協会 出島誠一

日本に生息するイヌワシの現状

イヌワシは北半球の高緯度地域に広く分布する大型猛禽類で、6亜種が認められています。日本に生息するのは、その中で最も小型のニホンイヌワシです。小型であってもイヌワシは、翼を広げると2メートルにも及びます。翼はグライダーのような形状をしており、森林内に入ることができないため、草原のような開けた環境で狩を行い、主にノウサギなどの中小動物を獲物としています。

日本のイヌワシは、獲物を発見し捕らえるために十分な空間が存在する高標高域の草原などの自然開放地、樹木と樹木の間隔が広い成熟した落葉広葉樹林、伐採地や放牧地などの人為的開放地などで狩を行っています。

ところが、この50年程度の間、我が国の森林環境は劇的に変化しました。イヌワシが狩りする場所として利用していた成熟した落葉広葉樹林や草地などが、スギやヒノキなどに植え替えられました。さらに、木材価格の低迷などにより人工林のスギやヒノキの伐採が進んでいないため、イヌワシが狩りに利用できる場所が激減し、現在イヌワシはまさに絶滅の危機に瀕しているのです。

赤谷プロジェクトでのイヌワシの調査活動

群馬県利根郡みなかみ町の国有林「赤谷の森」を舞台として、関東森林管理局、地域住民で組織する「赤谷プロジェクト地域協議会」、(公益財団法人)日本自然保護協会は、協働して生物多様性の復元と持続的な地域づくりの実現を目指す「赤谷プロジェクト」に取り組んでいます。

赤谷プロジェクト関係者は、赤谷の森に生息している1つがいのイヌワシを森林の生物多様性の豊かさを指標する野生動物として、その繁殖状況や狩りする場所などについて20年以上にわたって調査しています。

赤谷の森のイヌワシの繁殖状況

赤谷の森に生息しているイヌワシペアは、2003年以降13年間で4回繁殖に成功していますが、2010年以降は6年連続で繁殖に失敗しています。6年連続の失敗のうち2回は、巢内で雛を育てている期間(巢内育雛期)に巣が岩棚から落下したことが原因と確認されています。他の4回の失敗の原因は、特定されていませんが、子育ての期間(抱卵・育雛期)に食物(獲物)が不足していた可能性が考えられます。

このような状況を踏まえると、赤谷の森には、繁殖活動を維持するためのイヌワシが狩りすることができる環境は、最低限確保されているものの、十分な環境が安定的には確保されていないことが考えられます。

20年間の観察データに基づく伐採地の創出

赤谷プロジェクトでは、赤谷の森のイヌワシペアを20年間観察したデータ(過去に狩りを行っていた場所、主な飛行ルート、止まり場所等)から、潜在的に狩りに利用できる場所を抽出し、その中から、特に多くの獲物が必要となる抱卵・育雛期に利用することが期待できる、営巣場所から近い人工林を対象として、試験候補地を抽出し、伐採(2ha程度の小面積の皆伐)を行っていくこととしました。

2015年8~10月の間、これらの人工林のうち2haのスギ人工林を皆伐し、伐採した丸太を搬出して伐採地を創出しました。



伐採前の試験地（2014年9月20日）



伐採後の試験地（2015年10月4日）

伐採地のモニタリング

今回創出した伐採地をイヌワシが狩り場として利用するかどうか、通年にわたり調査しています。伐採地の対岸から双眼鏡や望遠鏡を使い、イヌワシの行動を観察していますので、すます。

平成27年12月18日時点で、伐採地でイヌワシが狩りに成功した様子はまだ確認できていませんが、伐採地の上空で獲物を探している様子や、伐採地を見渡すことができる場所で長時間止まっている様子が確認されています。

この試験の実施過程と成果を、絶滅の危機にある全国のイヌワシの生息環境の向上に役立てるため、多様な主体（林野庁職員、専門家、自然保護団体、地域住民、ボランティア、民間企業等）の連携により、モニタリングを実施していくとともに、その成果を発信していきます。



「赤谷の森」のイヌワシのつがい（左：2014年10月23日、右：2015年11月7日）